

歌集『あかね雲』より（十一）

登美子

四十粒に満たぬ身に

三十粒の新米もらい帰り来ぬ

竹と縄梯子と鎌を集めて来て

雪吊り段どる土曜日朝

春雨に嵩張り膨らみし紫陽花の

枝ぶり良きを座敷に活けぬ

ふとわれを呼ぶ声のして振り向けば

五十回忌の母の遺影あり

木の芽和えを母の味だと酒を酌み

五十回忌の宴は続きぬ

歌の友の病状聞きてもなす術なく

雨の一日を鶴折りて祈る

部品無く直せる見込みのなき時計

われより古きこの家を知りおり

南国に逝きて帰らぬ兄の事

母は日記にこまぐ書きおり

窓により灯の数ほどの愛があると

言いし母思う湯の原の宿

細き杖に一つ咲きたる白椿に

屈みて物言う母の如きに

定年に職失いしわが息子

さつそく村の役まかされる

長靴の托鉢の僧に甘酒を進じて

われも笑顔になりぬ